フィリップ・ヴァン・パリース
PHILIPPE VAN PARIJS

ヤニック・ヴァンデルボルト
YANNICK VANDERBORGHT

BASIC INCOME

ベーシック・インカム

～自由な社会と健全な経済のためのラディカルな提案～

［監訳］
竹中平蔵
Supervised by
HEIZO TAKENAKA

A RADICAL PROPOSAL
FOR A FREE SOCIETY
AND
A SANE ECONOMY

CROSSMEDIA PUBLISHING

BASIC INCOME :
A Radical Proposal for a Free Society and a Sane Economy by
Phillipe Van Parijs and Yannick Vanderborght
Copyright © 2017 by the President and Fellows of Harvard College
Published by arrangement with Harvard University Press through
The English Agency (Japan) Ltd.

監訳者まえがき

この本は、今後世界で経済・社会のあり方を議論する際に間違いなく大きな話題となるであろう「ベーシック・インカム」に関する、包括的な分析・解説書である。世界が混迷し社会の分断が進む中、本書は間違いなく今後の政策論議のバイブル的役割を果たす文献となるだろう。

これまで監訳者は、日本国内の経済政策としてこうしたベーシック・インカム（ないしはその類の政策）の導入がやがて必要になると主張してきた。しかしその度に、リベラル、コンサーバティブ、双方からの反論を受けた。そうした中で出会ったのが、ハーバード大学出版会から出された本書である。ベルギーの大学に所属する二人の学者、P. V. パリース氏（経済学・社会倫理学）とY. ヴァンデルポルト氏（政治学）が記した本書は、400ページ近くにものぼる大部の書物だ。その中には、なぜこうしたベーシック・インカムの制度が必要なのか、これまで世界各国でどのような議論や論争・実証がなされてきたか、経済的および政治的な実現可能性をどのように考えるべきか、貴重な情報が集約されている。これらは、今後日本国内で議論される政策論にとって、このうえなく有益な素材となると確信している。

私がベーシック・インカムの考え方に最初に関心を持ったのは、ミルトン・フリードマンの負の所得税という考えを学んだことがきっかけだった。実は本書の筆者は、最も理想的で目指すべき政策として、「資産状況にかかわらず、就労条件を課すことなく、個人単位で万人に対して定期的に現金収入をもたらす」、その意味で完全無条件のベーシック・インカムを主張している。これは、フリードマンの負の所得税とは概念的に異なるものではあるが、本書では負の所得税をベーシック・インカムに親和性の高い政策として位置付けている。同時に著者たちは、この理想的な政策が容易には実現できないであろうこと、したがって部分的な制度改革から行う「慎重

で、段階的アプローチ」の重要性をも強調している。

また著者たちは、暫定的な提案として、一人当たりGDPの４分の１の金額のベーシック・インカムを主張しているが、これをあえて日本に当てはめれば、月額約９万円という計算になる。日本国内では、財政負担を大きくしないという前提で月額７万円という試算例（元日銀政策審議委員・原田泰氏による）があるが、これらを含めて１つの目安になるかも知れない。

本書の監訳を通して私自身多くの情報を得ることができたが、とりわけ以下の３点について強い印象を受けた。第一は、ベーシック・インカムに関する問題については、既に長い論争が行われてきたことだ。その起源は、18世紀末にまで遡ることができる。そしてまた政策提案や論争に合わせて、これまでにさまざまな社会実験などが行われてきたことも重要だ。

第二の点は、ベーシック・インカムの論争には、私たちがよく知る世界的に著名な専門家が深く関わってきたことだ。先に述べたフリードマンもその一人だが、ガルブレイス、ミード、トービンなど、経済学の教科書に必ず登場する歴史的なエコノミストが名を連ねる。さらには、アメリカの1972年大統領選挙における民主党のマクガヴァン候補の場合など、公約にベーシック・インカムが掲げられる寸前まで行っていた。それほどに、この議論の根は深く、長い論争の歴史を持っている。

第三に、著者たちのベーシック・インカム論には、深い哲学的背景がある。何よりも自由と平等を尊び、恣意的な介入の支配を無くしたり、そのような介入から守ったりすることに重点を置いた、分配的正義の考え方だ。最も自由のない人たちがより自由を得るために、そして社会の遺産を共同でシェアするために、ベーシック・インカムが必要であると主張されている。

日本でベーシック・インカムを論じると、必ず「働かずに政府がカネを出せば、労働のインセンティブが失われる」、いや「これは社会保障費を削減するための戦略だ」といった批判が右・左の陣営から出される。こうし

た点については既に深い論争がなされてきたこと、近年はこれらを超えて更なる論議が行われていることを、本書から学ぶことができるだろう。

本書の構成と概要は、以下の通りである。

第１章「自由を実現する手段」では、なぜいま無条件なベーシックインカムが必要なのかが論じられる。複雑化する今日の世界には、脅威と機会がある。これを評価する基準は、自由――より具体的に、豊かな人だけでなく万人にとっての実質的自由である、と述べる。そして、経済的な安定を追求する方法を、根本的に立て直す措置として「ベーシック・インカム」が必要であることが主張されている。

技術革新など様々な要因によって所得獲得能力には大きな格差が生じている。経済成長が続けば、失業や雇用の不安定化が抑えられるという過去の考えを捨てる必要があるのだ。このため、厳密な意味において三つの要因を満たす（個人ベース、普遍的、義務を課さない）「無条件」なベーシック・インカムが必要であると結論されている。

ベーシック・インカムという用語が歴史的にどのように使われ、どのような内容を意味していたかも紹介される。また無条件ベーシック・インカムと、既存の条件付き最低所得制度の間には、根本的な違いがある点が強調されている。また能動的な福祉国家を目指すにあたって、「ベーシック・インカムは、コストではなく投資」という興味深い指摘がなされる。

第２章「ベーシック・インカムとその親戚たち」では、ベーシック・インカムと親和性のある六つの考え方について検討し、結論としてベーシック・インカムこそが理想的な仕組みであることを示している。検討されるのは、

①トマス・ペイン、ジェムス・トービンらも唱えた「基本的一括付与」、

②オーギュスタン・クールノー、ジョージ・スティグラー、ミルトン・フリードマンらが主張した「負の所得税」、

③低賃金労働者限定の給付付き税額控除としてアメリカで実施されてき

た「勤労所得税額控除」、

④ノーベル賞受賞者のエドムンド・フェルプスによる「賃金補助」、

さらに⑤「雇用保証」、及び⑥「労働時間削減」だ。とりわけこの章では、負の所得税との対比に、多くのスペースを割いている。

本章では、ベーシック・インカムにとって負の所得税は「もっとも近い競合相手」であることを認めつつ、その上でいくつかの点で前者が優れていると主張する。同時に筆者たちは、ここで吟味される代替案は、ベーシック・インカムと有意義な形で組み合わせることで現状を大きく改善できる場合も多い、との認識も示している。この点は、第7章の「政治的な実現可能性」への伏線にもなっている。

第3章には、「ベーシック・インカム前史：公的扶助と社会保険」というタイトルが付されている。16世紀以降、公的扶助と社会保険という考え方が2つのモデルとして示された。それらの論議の結果、どのような帰結がもたらされたかを論じている。ベーシック・インカムの議論は、18世紀から始まっており、その詳細は第4章で論じられる。そうした歴史を正しく理解するにあたって、公的扶助と社会保険という2つの社会的保護のモデルについて議論しておくのが必要……それが本章の役割である。

紹介されるのは、キリスト教における隣人愛の務めから、公的扶助の考えとその実践に至る過程、またその反動で公的扶助の揺り戻しが起こる過程、さらには社会保険という考えがいかに発展し、近代化された公的扶助がそれと共存してきたのか……。そこでは、ビーベス、ロック、マルクス、ピット、マルサス、リカード、ヘーゲル、モンテスキュー、ルソー、ビスマルクら、歴史を作った錚々たる大家たちが登場し、社会の根本的なあり方を巡る極めて興味深い議論が展開される。

今日では、社会保障というのは政府の当然の役割と認識されて、様々な制度が定着している。しかしここに至るプロセスで、いかに多くの識者が深く論争し、また社会実験が行われてきたのか、極めて興味深いものがある。

第４章「ベーシック・インカムの歴史：ユートピア主義者の夢から全世界的な運動へ」は、文字通り本書の主題であるベーシック・インカムの議論がいかにして誕生し、発展・変遷してきたかを論じている。前章で示された社会的保護の２つのモデルとは異なるものとしての、“ベーシック・インカム”だ。こうした議論は18世紀末から展開されており、その歴史的展開と変遷を振り返りながらこの考えの基本部分が詳述される。

まず18世紀末から19世紀にかけて、トマス・ペイン、ジョン・スチュアート・ミルらから始まったこの議論は、第一次世界大戦後のイギリスにおいて、一時期国民的議論となっていく。多くの論者を巻き込み、「自由」「共有資産の公平な配分」「労働のインセンティブ」といった概念を軸に展開されていったのだ。そしてアメリカで公民権運動が頂点を迎えた1960年代に、ベーシック・インカムは、より具体的な政策論として取り上げられていった。アメリカの政策論争において、ベーシック・インカム型の構想が（短い期間ではあったが）華々しく論じられたのだ。

またこの間、いくつかの実証実験も行われた。またアラスカ州において、実質的な意味でのベーシック・インカム制度が導入されているという紹介も興味深い。そして欧州での動きも含め、1980年代中頃以降こうした論議のための世界的なネットワークが形成されていく姿が描かれる。

ベーシック・インカムを具体的な政策として議論するに当たり、その経済的・政治的な実現可能性が重要な問題となる。それらを第６・７章で論じる前段として、第５章「倫理的に正当化可能か？：フリーライド（ただ乗り）対公平な分配」では、その倫理的な正当性が議論される。ベーシック・インカムについては、道徳的な反対論があり、また関連して社会保障に関する哲学的な論争がある。それらについて踏み込んだ分析が示され、ベーシック・インカムが倫理的に正当化されることを結論づけている。

ベーシック・インカムが貧困・失業を撲滅することを認めながらも多く

の人がこれを批判するのは、大きく２点だ。労働は良き人生の一部であるのだから、無条件に所得を与えるのは怠惰という悪徳を助長するのではないか……。健康な人が他人の労働によって生活するのは公正さにかけるのではないか……。

筆者たちは、そうした２点について（特に第２の点に）焦点を当て、ベーシック・インカムの意義と重要性、そしてその倫理的正当性を丁寧に解説する。その根底には、万人の実質的自由を実現するという高い理念がある。そして、リベラルな平等主義の一形態としての「分配的正義」に基づいて、ベーシック・インカムの倫理的正当性が主張されていく。リバタリアン、マルクス主義といった立場がベーシック・インカムの主張とどのような位置付けになるのか、そうした興味深い分析も示される。

第６章「経済的に持続可能か？：財源、実験、移行の方法」では、ベーシック・インカムが財政的な意味での実現可能なのか、そして持続可能なのかという、多くの人々が懸念する重要問題が取り上げられる。

財源としてはまず、中核となる個人所得税の議論から始まって、さまざまな手法が検討されていく。容易に想像されるように、個人所得のみに財源を求める単純計算をすれば、相当の高税率が必要ということになる。しかしその際、よりダイナミックに、その制度によって経済行動がいかに変化するかを考察する必要がある。本章ではそうした実験例やシミュレーションを紹介し、その効用と限界が示される。

さらに、個人所得以外の財源（資本など）について考察していく。この制度が経済的に持続可能か、確かに難しい問題だが、その選択肢は多様である。また一口にベーシック・インカムと言っても、その導入の仕方（何を廃止するか、どこから資金を賄うか、など）如何で、内容は多様だ。筆者らは、課税なしにベーシック・インカムを可能にする方法や新たな可能性などにも言及している。

当然ながら、どれも単一では決定的に持続可能性を保障するものではな

いだろう。その上で筆者らは、よりリアリスティックに、そして慎重に前進できる様々な方策（部分的なベーシック・インカム、控えめな水準からの開始など）を、慎重な段階論的アプローチとして考察している。

続く第７章「政治的に実現可能か？：市民社会、政党、裏口」では、ベーシック・インカム制度の政治的なフィージビリティが論じられる。当然ながら政治的な可能性を考えるにあたっては、国民の意識（世論調査）が重要だ。しかし地域特性や質問内容によって、ベーシック・インカムへの評価は大きく分かれ、限界がある。そこで、市民社会の様々な集団や政治的派閥ごとに、議論の内容を検討している。

ます労働組合だが、興味深いことに労働者の立場を守るはずの労働組合は、いくつかの理由（組合員の大部分が安定したフルタイム労働者、など）でベーシック・インカムに前向きではなかった。また雇用者に関しては、負担の面からとりわけ反対論が強かった。それでもより良い社会のために、ベーシック・インカムへの理解が深まりつつあることが紹介される。

ベーシック・インカムの政治的な見通しを評価するにあたって、それと親和性があると考えられる各プレーヤーの態度、その背後にある論理が検証されねばならない。筆者らは、プレカリアート、女性、社会主義者、自由主義者、環境保護論者、キリスト教徒、といった多様なカテゴリーについての分析を提示する。現状、これらの勢力は大きな政治的力になってはいないが、いくつかの新しい兆候が生まれつつある。

本格的なベーシック・インカムが容易に採用される環境には、未だ至っていない。しかし、その可能性は高まっており、個人単位だが部分的で慎重な導入などへの期待が述べられていく。

なお、原書は８つの章から成り立っているが、大部の文献であること、また日本の読者の関心がどこにあるかも考慮して、移民・EUについて論じる第８章については著者の許可も得て割愛した。関心のある読者は原書を参

照されたい。また本書には、大部の脚注が付けられているが、これらはPDFで版元のホームページよりダウンロードして頂くという扱いにさせていただいた。

今回の大変面倒な企画・編集を担当して下さったクロスメディア・パブリッシングの林聖氏には、心からお礼を申し上げる。また本書は、非常に格調高く難解な英語で書かれており、翻訳を担当された永盛鷹司氏は、大変ご苦労が多かったと思う。心から感謝申し上げたい。さらに、校正の面でご尽力頂いた（株）SHAIFの祖父江麻世さんに、心から御礼申し上げる。

本書は、社会福祉の歴史、哲学、論争を学ぶ格好の指南書でもある。ベーシック・インカムは決して容易には実現しないだろうが、部分的な実現を含め、これからの社会のあり方の根本を担う、極めて重要な政策になる。考えてみれば、生活保護（日本の導入は1950年）など今日の制度を初めて導入するときも、大きな論争があったはず。それに匹敵する、社会のあり方をどうするか、自由や平等をどう認識するのか、社会の「パラダイムシフト」に関する大論争を、我々は経なければならないだろう。

本書はそうした際の、建設的で意義深い論争の道標になると確信している。

2022年10月

監訳者　竹中平蔵

監訳者まえがき … 003

はじめに … 016

第1章
自由を実現する手段

Chapter 1 :
The Instrument of Freedom

新たな世界 … 021
ベーシック・インカム … 024
現金給付 … 032
個人単位の所得 … 034
普遍的な所得 … 038
義務を課さない所得 … 044
健全な経済 … 054

第 2 章
ベーシック・インカムと、その親戚たち

Chapter 2 :
Basic Income and Its Cousins

ベーシック・インカム 対 基本的一括付与 … 058
ベーシック・インカム 対 負の所得税 … 062
ベーシック・インカム 対 勤労所得税額控除 … 072
ベーシック・インカム 対 賃金補助 … 076
ベーシック・インカム 対 雇用保証 … 080
ベーシック・インカム 対 労働時間削減 … 083

第 3 章
ベーシック・インカム前史：公的扶助と社会保険

Chapter 3 :
Prehistory : Public Assistance and Social Insurance

想像段階の公的扶助：
ビーベスの『De Subventione Pauperum（貧しい人への扶助について）』… 088
実践段階の公的扶助：イープル市の救貧法からロックの思想まで … 093
脅かされる公的扶助：スピーナムランド制度と揺り戻し … 097
大胆な宣言：啓蒙主義と革命 … 104
社会保険：コンドルセからビスマルクまで … 107
社会保険の後の公的扶助：ルーズベルトからルーラまで … 111

第 4 章

ベーシック・インカムの歴史：ユートピア主義者の夢から全世界的な運動へ

Chapter 4 :
History : From Utopian Dream to Worldwide Movement

構想段階のベーシック・インカム：
トマス・スペンス対トマス・ペイン … 116

国家規模のベーシック・インカム：ジョセフ・シャルリエ … 120

真剣に検討されるベーシック・インカム：
ジョン・ステュアート・ミルのフーリエ主義 … 123

議論が深まるベーシック・インカム：第1次世界大戦後のイギリス … 127

1960年代初頭の保証所得：セオボルト対フリードマン … 134

アメリカのリベラル派のベーシック・インカム：トービンとガルブレイス … 140

短命に終わった絶頂期：マクガヴァンの「デモグラント」… 144

ユニークな成果：アラスカの配当金 … 148

国を超えたネットワーク：ヨーロッパから世界へ … 151

第 5 章

倫理的に正当化可能か？フリーライド（ただ乗り）対 公平な分配

Chapter 5 :
Ethically Justifiable ? Free Riding Versus Fair Shares

ベーシック・インカムとフリーライド … 158

万人の実質的自由 … 164
ジョン・ロールズ 対 マリブ海岸のサーファー … 172
ロナルド・ドウォーキン 対 海辺の不良者 … 178
リベラル平等主義者が反対する理由 … 183
リバタリアニズムと土地の共同所有 … 187
マルクス主義と、共産主義へ至る資本主義的な道 … 190
ベーシック・インカムと幸福 … 198

第 6 章

経済的に持続可能か? 財源、実験、移行の方法

Chapter 6 :
Economically Sustainable ? Funding, Experiments, and Transitions

労働所得 … 206
ベーシック・インカムの実験 … 212
負の所得税の実験 … 215
計量経済モデル … 220
資本 … 224
自然 … 227
貨幣 … 231
消費 … 234
カテゴリー別のベーシック・インカム … 240
世帯ごとのベーシック・インカムと税の上乗せ … 244
部分的なベーシック・インカム … 248

第 7 章

政治的に実現可能か?
市民社会、政党、裏口

Chapter 7 :
Politically Achievable ? Civil Society, Parties, and the Back Door

世論 … 257
労働組合 … 261
雇用者 … 271
プレカリアート … 273
女性 … 276
社会主義者 … 281
自由主義者 … 289
環境保護論者 … 293
キリスト教徒 … 300
組織なき結束 … 305
参加型所得と裏口 … 310

おわりに … 318

注釈ダウンロードのご案内 … 321
参考文献 … 322

はじめに

Prologue

「持っている金は自由のための手段だが、追い求める金は隷属のための手段だ」

"Th e money that one possesses is the instrument of freedom;
that which one strives to obtain is the instrument of slavery."

ジャン・ジャック・ルソー『告白』
Jean- Jacques Rousseau, Confessions
（『ルソー全集 第1巻』白水社）

私たちの社会、および私たちの世界の未来に対する、自信と希望を再び打ち立てるためには、今信じられている知識を覆し、先入観に揺さぶりをかけ、極端な思想をも受け入れることを学ぶ必要があるだろう。この極端な思想の１つこそ、単純だが決定的に重要な、無条件ベーシック・インカムの思想である。資産状況にかかわらず、就労要件を課すこともなく、個人単位で、万人に対して定期的に現金収入をもたらすものだ。

この発想自体は新しくはない。18世紀末以来、大胆なことを考える人たちの多くがこうした発想を持っていた。だが、不平等が拡大し、オートメーションの新たな波が押し寄せ、地球環境を考えると成長には限界があるという意識が急速に強まっている今日、無条件ベーシック・インカムの思想は、世界中でこれまでになかった規模で注目されるようになった。発展した福祉国家の行く末を案じる人ならば誰でも、ほぼ確実にこの思想と出会うだろう。また、限りある地球のなかのまだ発展していない地域における基本的な経済安定を、どのように設計するか思案している人も同様だ。無条件ベーシック・インカムの思想は必ずや、明日の世界を自由の世界にしたい人の興味を惹きつけるだろうし、そうした人々を感動させることもし

ばしばだろう。ここで言う自由の世界とは、単なる形式的自由ではない実質的自由が、幸福な少数の人のみならず万人に保証された世界である。

本書の第1章では、無条件ベーシック・インカムを推進する中心的な論拠を提示する。すなわち、無条件ベーシック・インカムはいかにして貧困と失業、不愉快な仕事、狂気じみた成長の問題に立ち向かうのか、ならびに、無条件ベーシック・インカムはいかにして自由を実現する手段や、人間を解放する持続的な制度の枠組みに欠かせない要素を提供しうるのかを論じる。第2章では、ベーシック・インカムという発想に惹きつけられている人（筆者たち自身も含む）に、ある程度好感を持たれる別の考え方をいくつか検討し、なぜベーシック・インカムが好ましいと考えられるかを指摘する。第3章では、16世紀以降に確立された2つの社会的保護のモデルである公的扶助と社会保険について、その思想的・制度的な結末を概説する。第4章では、今述べた2つのモデルとは根本的に異なる第3のモデル、ベーシック・インカムの思想のとても興味深い歴史を、18世紀末から振り返る。第5章ではまず、ベーシック・インカムに対する道徳的な反対論を取り上げる。それに応答する形で、第1章では簡潔にしか語らなかった、ベーシック・インカムが本質において倫理的に正当化される根拠を提示し、いくつかの別の哲学的なとらえ方についても論じる。第6章では、実質的なベーシック・インカムが財政的に実現可能なのかどうかを問い、これまで提案されてきたさまざまな財源を検討する。その議論を背景に第7章では、世界中の政治的・社会的勢力によるベーシック・インカムに対する態度を概観することで、ベーシック・インカム実現への政治的な見通しを評価する。そして、起こりうる揺り戻しを避ける方法も検討する。本書全体の主眼は豊かな社会に対する提案であるが、それは開発途上国にとってもますます関係のある事柄になってきている。そのことについても、端々で論じられるだろう。

無条件ベーシック・インカムの思想を仔細に検討した後で、それを支持するか、拒絶するかを選択すればよい。本書は確かに、無条件ベーシック・

インカムがなぜ支持されるべきか、筆者たちが考える理由を説明したものだが、熱狂的な同志のための宣伝パンフレットではない。本書の大部分は、さまざまな分野から多様な言語で出されて急速に広まっているベーシック・インカムに関する文献を、わかりやすく、批評的に統合したものだ。したがって、信頼できる情報と、理解の助けとなる知見の保管庫となれるように願っている。そのような情報や知見は、双方の陣営によく見られる事実誤認や概念的な混乱を正してくれるので、ベーシック・インカムに賛成する人にとっても反対する人にとっても有益であるはずだ。また、本書は、ベーシック・インカムの妥当性と実現可能性に対して投げかけられるきわめて本格的な反対論に、真正面から取り組もうとしている。こうした反対論を巧みにかわせば、テレビの討論には勝てるかもしれないが、正義に適う提案が長期的に認められることにはならず、むしろ逆効果だろう。いかにも、世界をよりよくすることは可能であり、その実現のためには、想像力を豊かにし、情熱を持つ必要がある。しかし、不都合な事実や厄介な問題をごまかさない、知的に誠実な議論も同じくらい不可欠だ。本書を通して読者には、この共同作業に参加してもらいたい。

ベーシック・インカムは、喫緊の問題を軽くするための賢い方法というだけではない。それは自由な社会の大黒柱だ。その社会では、労働を通してであれ、労働以外の活動であれ、人々が成功できるための実質的自由が公平に分配される。それは社会主義と新自由主義の両方に代わる道の本質的な要素である。また、過去の功績を擁護したりグローバル市場の流れに抵抗したりするよりも、はるかに実りの多い現実的なユートピアの実現に不可欠な要素だ。ベーシック・インカムとは、危機を機会に、あきらめを決意に、苦悩を希望に転換するために求められる未来像において、極めて重要な役割を果たすものである。